

【佳作】

平泳ぎで泳ぐ

西山陽菜（埼玉県 栄東中学校 3年生）

ある火曜日の四限目。私は北島康介になっていた。もちろん、実際はスクール水着を着た普通の女子中学生だ。ではなぜ突然「北島康介」だなんて言い出すんだ、と疑問を持った人もいるだろうが、私はそんな疑問に答えていられるような状況ではなかった。危機的状況だ。絶対的ピンチだ。

私はその時、平泳ぎの実技試験を受けるために列に並んでいた。ここまで言ってしまうえばお分かりだと思うが、私は平泳ぎができない。

これまでの水泳の実技試験は、一年生はクロール、二年生は背泳ぎと、見よう見まねで何とか乗り越えて来たが、三年生になった今年の課題は平泳ぎ。昨年までとはワケが違う。

私はこれまでの人生で平泳ぎで泳いでみようなんて事は考えたこともなかった。一応、スイミングスクールに何年か通っていたものの、あまり物事が続くタイプではないため、平泳ぎの前段階でとっとと辞めてしまったのだ。それがまさか実技試験になるなんて、私の人生では全くの想定外だ。

水泳の最初の授業、私は平泳ぎが課題だということに衝撃を受けたのだが、もっと驚いたのはクラスの大半が平泳ぎで泳げると

いうことだ。入水してからまだ五分も経っていないのに、さっきまで水が冷たいだの何だのと騒いでいた友達は、みんなすいすいと泳いで25メートル先で私を待っている。私は焦った。とにかく泳がなければ。平泳ぎで泳いでいる人が水中でどんな芸当をしているかなんて知ったこっちゃない。私はでたらめに足を動かし手で水をかきわけ前に進もうとしたが、身体は沈む。沈む。沈む。

それから二回の授業で、私は沈んで溺れて水を飲んで、苦しみながらも平泳ぎというものの輪郭をつかみつづけた。

そしてその時を迎えてしまったのだ。試験当日、皆、次々に飛び込んで行く。次は私の二つ前の子の番だ。実はこの子も水泳が苦手で、昨年の背泳ぎの試験では顔だけが浮いていた。水をかく手やバタ足の動きは一切見えず、ゆっくりと顔だけが水面を進んで行くのは何ともシュールな光景だった。

この子も平泳ぎが全くできず、二回の授業を共に頑張ってきた仲間だった。この子が泳げたら私はどうなるかなんて関係なく、一緒に頑張ってきた「泳げないヤツ」として純粋に応援していた。でも心のどこかで一人取り残されるのが怖くて、その子が泳げないことを期待する自分もいた。しかしその子は泳いだ。25メートルを一度も止まることなく泳いだ。先生や水泳が得意な子からどう見えているかは分からないが、私にはその子が平泳ぎ25メートルの壁を乗り越える瞬間が見えた。

こうなったら私もやるっきゃない。ルールは「25メートルの途中で足を着いたら減点」だ。減点されてたまるか。死んでも足は着けないことを私は心に決め、神に誓った。そこで、私は北島康介になったのだ。あとは気の持ち様、自分を北島康介だと信じて飛び込めば、学校の25メートルプールだって、大海原だって、壁

は高くないと思った。そうして、いざ飛び込んでからの事はあまり覚えていない。本当に無我夢中だったのだ。目が悪くてプールの底の線が見えないからと新しく買った度付きゴーグルだってその時は全く無意味だった。気が付くと私はプールの壁にタッチしていた。一度も立たず、溺れる事もなく、無事に大海原の旅から生還したのだ。

フォームとか細かいことはどうであれ、この私が無事に泳ぎ切った。この事実がただただ嬉しくて、私は同じく無事に壁を乗り越えた仲間と互いをねぎらい、慶びを分かち合った。

平泳ぎバンザイ！